

● 『生活 照方雑文★★』 島尾伸三 みすず書房（7月NO1）

独り遊びの楽しみを予感させ、数ヶ月前に購入していた本。家族が寝静まったある夜、ゆっくりとページをめくり始めました。ぼんやりと、しかもどこか振れたその世界は、今も、心の底で座り続ける死の香りをもつ自分が、笑いかけている幻想を抱かせます。

それは強烈なまでも“生”の中で呼吸をしていた幼き頃、そんな自分が本当に見ていたものは、生きづいていてモノ達の少し向こうにある死の表層の蠢きだったことを気付かせてくれます。

本書では、慎ましく肩を寄せ合い、子どもの笑いと小さな出来事に心震わせる小家族が、あまりにもそのまま写し出されていて、切なささえ覚えてしまいます。

写真の醸し出す世界の柔らかさと、題の揺らめき、短文の幻想性が溶け合うことを求め、しかもかなわない悲哀を美しく奏でています。

著者は、僕が最も敬愛する作家島尾敏雄の長男である。

写真題より

散歩／うまく均衡がとれなくて

昼寝する妻／知り合えたのだから

長女マホ 妻登久子 妹マヤ／彼女たちを無責任にかかえてしまったのです。

● 雑誌「大航海」—（複雑系）批判的入門 新書館

おもしろい特集を組んでくれるので時々購入する雑誌だが、なにせ一般書店には無く、長崎大学生協まで買いに行かなくてはならないのが難である。今回は「複雑系」に焦点をあて、13の小論と1つの対談を載せている。分野も総論、経済、生物学、数学、物理学、社会学他、多岐に渡っている。いかにも、という感じで。

では、なぜ今「複雑系」なのか？

今、ここで言えば、近代科学の方法論に対する批判と、コンピュータ発展による、情報処理の高速・多量化の結果だと思う。

今でも人類は、社会や科学が複雑だと気付いていなかったというわけではない。むしろ直感として気付いていたのである。

「ある複雑な事象」があって、これをどうしようと思った時に、このままで

は捕えられない。そこで、取りあえず、考えられる限りバラバラにしてみよう。その1つ1つを調べてみようと考えた。そして、それをまた組み立てたら、元の「ある複雑な事象」になるはずだと考えた。勿論、この考えでうまくいく領域もあり、ヨッシャヨッシャと科学は進歩する。では、どうもこれじゃうまくいかない領域はどうしたか。当初は、後で考えようぐらいだったものが、科学的思考が唯一真理探究の方法となった時、人類は近代を迎へ、摩訶不思議は野生の思考となった。

哲学からの近代思想批判、コンピューターの演算能力の向上が、僕らの生きている社会が、生物的にも様々なデータ的にも、偶然に近い、ほんのゆらめきの一点でしかないことを明らかにした。

「複雑系」は、新らしい理論ではない。

言ってみれば、そろそろ科学思考だけではなく、他の方法もう一度「ある複雑な事象」を考え直してみようよ、ということだと思う。

だから、量としての「複雑系」は、流行と共に消えてゆくだろうが、質としての「複雑系」は残るだろうな、と勝手に考えている。だって、人間は「ある複雑な事象」である世界を把握したいという根本的欲求をもっているから。

●文藝春秋 8月号

「2千人の『アンダーグラウンド』」村上春樹

『アンダーグラウンド』を読んだ人は、ぜひこれを読んでみて下さい。あの本は、あの本で閉じているのではなく無数につながる先への入口だったことが、これを読むとよくわかります。

と同時に、この文藝春秋から読んだ人は、これを入口に“アンダーグラウンド”に続いていくのです。

● 『歴史の文法』義江彰夫 他 東京大学出版会 (7月NO6)

歴史とは何か？

一般的なイメージで言えば、過去→現在→未来へとつながる事実の集積であるように思える。では、私たちがその事実の集積又は事実を知り得ているのはどうしてか。言わずと知れた過去の物、史料があるからでる。他には？
ウム

じゃ、偶然、現在まで残っている幸運を得た石ころ達やその当時の知識人た

ちによる主観に満ちた文献が歴史なのか。

そこには、過去の事実があるのではなく、あるのは、それらの痕跡か、それを記述した史料だけである。それらが残されていない事実はどうなるのか。はっきり言って“無い”ことと同義である。なんとも絶望的な気持ちになってしまう。残念ながら僕らが抱いている歴史とは過去の事実なんかではない。では、再度問おう、歴史とは何か。

歴史とは、過去の限られた史料を現在の僕らの意味に読み変えたものなのです。

常に読み変え可能な現在の意志がある限りなのです。大海原にかすかに見える岩頭は、時にはそのすそ野に広がる巨大な暗礁で、僕らを座礁させるであろう。後方に残る水脈は、一瞬の輝きと共に、無限の波の彼方に消え去るのみ。

- ○『たまご』 ガブリエル・バンサン・ブックローン

○『アンジュール ある犬の物語』 同上

○『セレスティーン アーネストとの出会い』 同上

毎週日曜日の10時には、近くの図書館を散策している。借りた本を返し、新しく届いた本を受け取り、読みたい本を注文して、書架をブラブラとする。最後に行き着き、一番時間をかけるのが児童書のコーナーである。洸太郎と桃子は勝手に自分の本を選び、僕は2・3冊絵本を借りる。

この2・3冊の絵本選びが実に楽しい。

これらの絵本は、子供には不評であることも多いが、僕が読みたくて借りている本なので問題ない。

偶然手に取ったバンサンの『たまご』。この絵にオツと思ってしまう次々と借りた。言葉が少なく、絵本というよりも画集の様な雰囲気、しかも線が生きている。スゴイ。

物語の意味・解釈をすることになれて、自然、その様にしか考えられなくなってしまった頭には、児童書は一服の清涼剤どころか、ガツンと一発意味の分からない星一徹の鉄拳である。

- 『現代思想の冒険者たち⑤バシュラール 科学と詩』 金森修

僕は時々、背伸びするが如く、現代思想家や哲学者の本を手にする。大方途

中で断念してしまうのだが、暫くすると、別の著者の本を手にとっている。だから、役に立っているかと問われれば「否」と答えるしかない。癖の様なものだ。

独自に岩波文庫や世界の名著を行きあたりばつたりに読んでいた僕にとって、このシリーズは、選択の重荷を預けた分だけ楽になった。特に「バシュラール」の様に、一冊も読んだことがなかったような人との出会いは、気乗りしない見合いで、思わぬ美人と引き合わされた時に、日頃信じてもない運命論を心の中で呟いてみたりするのに似ている。「この人だよ！！」最も有名な書物である「水と夢」で、彼は、詩ことにその言葉の想像力：イメージに注目する。

想像力には、形式的想像力と物質的想像力があるとする。形式想像力は、絵画的でかつ言葉の動的なイメージであり、後者は、言葉の表すものの根源に関わり、ものの重心と底にあるものとする。

多くの詩的イメージが失敗するのは、前者の形式的な戯れで終わってしまうからで、言葉のもつ物質性に根付けば、そのイメージは、心理に持続的に働き続けると言う。そして彼は、火・水・空気・土の四元素の詩的世界を解明し始める。

人は任意の環境内で任意の想像をするわけではない。イメージには、ある種固有の物質的要素が負荷されているのだ。イメージが世界の重心となった現在、彼の想像力論は再考されるべきだと思う。

加えて彼は、デカルトの単純本性の分離という方法論的過程を、執拗に批判する。これは、科学の基本理念で、事象は単純化できる要素で成り立っているという考えである。バシュラールは、この単純性は、理論として構築するため必要とされる単純性であって、存在は近似的で、且、連繋する関係存在であるとする。

又、「認識論的障害」という大変興味あるキーワードで誤謬と無知の違いを浮き立たせる。これがまた面白いのだ。無知は<まだ存在しない問題>。誤謬は<もはや存在しない問題>とする。特に誤謬は、かつて一度は“問い”として成立させられ、それらの解答が提出されたことによって、再度の“問い”としては存在しないものとする。しかも、それは正解を見えにくくさせるものとして存在するという。それから、それから・・・・・・・・

他にも、“科学的思考の心理学”“コギターイムズ”など、ホッホーものが盛り沢

山。このジイさん、只者じゃないな、と深く頷いてしまう。

● ○『無神学大全 内的体験 G. バタイユ』現代思潮社

○ 雑誌「ユリイカ 特集 バタイユ」 1973.4 青土社

○『現代思想の冒険者たち12 バタイユ 消尽』湯浅博雄 講談社

いままでにも、ある思想の影響下に囚われて、そこから逃れるため、しばらく時間を費やすことがあった。

僕は、今日からバタイユの思考様式に下ってしまったことを宣言する。断片的に僕の中で培われていた考えは、本質的には、バタイユ思想で語られていた。

これから僕の闘いの相手は、バタイユ思想ということになる。

人が何かを“行なう”こと、この行為は何を意味するのか。

行為とは、その行為の結果が将来自分に有益であることを“想定”していることに他ならない。その結果が、自分と結びつけられ所有され、初めて「意味あるもの」となる。

これは、動物から人間が人間化する大きな要因であるが、この観念は「意味あるもの」を中心にすえた人間の思考様式の根幹を形成した。言葉を変えると、<知>的思考の基盤は、自分にとっての欠如要素を認識し、それを「満たせるもの」＝「意味あるもの」という観念である。

「意味あるもの」は「意味なきもの」を同時に規定する。

これがあらゆる基準・評価の初源である。

これらの思考様式が、人間化の初動であるが故に、気付き、客観化は得にくくなる。その分強度に、思考や制度の前提となってしまう。

欠如を満たそうとする情念が<至高であろう>とする願望を生み、個の規定と同時に宗教・国家等の原型となる。

私たちは、言語のもっている仕組みや効果が、思考の前提であることに無自覚である。<私>は自由に思考しているものと感じている。しかし、それは、「既に語られ、語られつつある世界の内側」にいるにすぎない。

同様に、「私」という「主体」もこの「尺度を暗黙の前提にして図、評価し、共約している」世界内の必要要素でしかない。

つまり「私」＝「主体」がいて、その対象としての世界があるのではなく、

「共約の世界」の為に、自己同一な「私」が必要なのである。では、どうし

たら「私」の外に行くことが可能なのか。

バタイユは「消尽」「濫費」「非知」を提出する。

「意味あること」を生む思考の外へ、世界の外部へ決して完了し、至ることなき道を「反復」せよ、と言う。

「私」の規定・思考様式・認識方法を止むことなく変え、常に自らに異議を提出し無限に終わることなく、自らを消しては書き、書いては消す運動に自らを投入するしか無い。

● 『現代思想の冒険者たち 12 ガダマー 地平の融合』丸山高司

名前は聞いたことあったが、どんなことを述べているのか、全く知らなかった。今回、本書を読んで興味ある主旨と疑問を少し。

人間が活着ているとは、どうということか。

この問いは、西洋哲学の伝統的な問いであるが、ガダマーの師ハイデガーが一步掘り進めた「解釈学」を元に、人間は活着ている限りいつも「理解する」という仕方で活着ている、とする。

常に、自己理解や世界理解を行なっており、そうしている存在が人間だという。成程 フムフム

では、「理解する」とは、どうということか。

「～を理解する」「私を考える」というように、理解するにはその対象が必要である。しかもその対象が対象となる為には、すでに対象の把握（理解の先行構造）が必要である。

これをガダマーの「先入見」という。

私達の理解は、この先入見を足場にし、そこから出発しなければならない。

そしてこの先入見は、どうしても時代という歴史性を限界として持っている。

言葉を変えれば、私達は、この時代という歴史的存在なのである。そんな私達が、未来に向かうには、過去の理解が必要となる。そして、過去の地平と現在の地平との相互交渉が「地平の融合」を生み、新たな自己理解が形成される。

この融合は、完了されず、たえず歴史的状况によって変化し常に開かれているとする。

これらの基本理解から、テキスト解釈、世界経験の言語性等現代的な「理性」

の復権を目指している。

しかし、以上見てきた様に、存在理解のベースは、ハイデガーの現存在の運動を、歴史的地平を用いて敷衍したように思える。しかも、認識様式は、あくまでもヘーゲルの弁証法を強固に維持している。

ガダマーは、現代思想が批判する「真理」思想の欠点をあえて掴み直す。それは、「表現」に失敗し続ける現代思想を尻目に、無限の「地平の融合」が生きている「表現」であることに胸を張り歩み続けるかの様に。

- 『現代思想の冒険者たち 14 ポパー 批判的合理主義』小賀原 誠
批判的合理主義と銘打たれた本書。ポパーの思想的姿勢が示すように、領域は、論理学、確率論、社会科学、進化論、哲学他と、恐ろしく範囲が広い。しかし、一読した印象としての根本原理は「反証可能性」といういわゆる論理学だと思う。

論理学の本なんか読むのは、最も感銘を受けた一冊であるヴィトゲンシュタインの「論理哲学論考」以来で、完全に錆びついた神経細胞をガリガリいわせて読んだ。

ベーコン以来、科学の理論を導く方法として“帰納法”がとられてきた。即ち、1つ1つの事象から、それら全体に当てはまる法則を見つけ出すという方法である。しかし、ポパーは、帰納法は論理的には成り立たないと考える。つまり、個別の観察から一般法則への帰納を行なうためには、帰納を成立させる原理が必要となる。いままでその方法でうまくいったという反論は、帰納の原理を正当化する為に帰納を行なっており、それでは、帰納の原理の証明は成り立たない。

ポパーは言う「法則的言明は実証されないが反証はされうる。」と（反証可能性）帰納法という法則は、故に存在証明はされていない。ただ反証を待っている法則であり、仮説として保持しているだけである。言えるのは、反証される可能性がある、これだけだ。この反証可能性をもった法則こそが科学の方法である。科学の方法とは、積極的に反証を試みることだ。

この思想は、彼を生涯、様々な分野との論争に駆り立ててゆく。反証可能性は、あくまでも原理である。そこから派生する様々な彼の思想は、対象が変わるたびに斬新な切り口を僕らに見せてくれる。

ただ、どうしても彼が諸問題に取り組む時の論理イメージがダーウィニズ

ム的なのが気になった。

知っての通り、ダーウィニズムの“自然淘汰”は現在かなり怪しくなっている。

反証可能性という卓越した論理を生んだポパーも、自分の発想の根幹に反証は出来なかったのだろうか。

もし、反証したとしても、それもポパーの発想なのだけど。